

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	高梨 久美子 【比較社会文化学専攻 平成26年度生】	要 旨
論文題目	16世紀前半スペインの対イングランド外交交渉 ーウスタシュ・シャピュイ大使を中心にー	高梨久美子論文は、ヨーロッパに巨大な国家が林立し、合従連衡の複雑な外交と国際関係が出現した近世において、それらの外交を実際に担った常駐大使の活動を丹念に追った論文である。神聖ローマ皇帝カール5世（スペイン）からイギリスに常駐大使として派遣されたウスタシュ・シャピュイが、ヘンリ8世期のイギリスでどのような外交活動を行ったのかを、主にシャピュイから皇帝への報告書簡を中心とした膨大な史料から克明に跡付け、その結果、従来のイギリス史研究では見落とされてきた新事実を明らかにしている。
審査委員	(主査) 教授 新井 由紀夫	<p>16世紀前半、イギリスはヘンリ8世の離婚問題を契機に国王を首長とする国教会体制をとり、スペインとフランスという2大勢力の狭間で生き延びてゆくために主権国家への道を歩み始めていた。上訴禁止法（1533年）や国王至上法（1534年）制定はイギリス側からすると主権国家への道を決定づける意味があり、イギリス史研究上もその意義が高く評価されてきた。しかしそれはあくまでもイギリス国内に限ってのことであり、この時期の大使書簡を見る限りこれらの法がイギリス国制を大きく変える画期的なものであるとの認識は、当事者の一方であるカール5世側にはなかったことを高梨論文は明らかにした。その後1536～38年にかけて、国際的に孤立していた弱小国イギリスは、時に誇大な称号を主張し、ネーデルラントとの通商問題やイタリア戦争における中立政策、王女メアリの正嫡問題などを外交カードに、イギリス信教体制の黙認という譲歩をスペインから引き出していった。そして1543年のスペインとの対仏同盟締結を機に議会で王の称号を正式に決定し「ヘンリ8世、神の加護により、イングランド王並びにフランス王、アイルランド王、信仰の擁護者、イングランド教会およびアイルランド教会の地上における至上の長（首長）」とするなど、徐々にかつ慎重に、外交と内政を連動させつつ主権国家へと歩み始めたのである。</p> <p>以上、自国史の視点にとどまりがちなこれまでのイギリス史研究に対して、外国大使という他者から見たイギリスという独自の視点に立つことで、通説に対する修正を試みている点は高く評価できる。</p>
	教授 安成 英樹	
	教授 岸本 美緒	
	准教授 清水 徹郎	
	こども教育宝仙大学こども教育学部 教授 山本 秀行	